

## 誕生と即位

### -オスマン帝国における王権祝祭の文化と変容-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学東洋史談話会 公開日: 2020-09-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奥, 美穂子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/21108">http://hdl.handle.net/10291/21108</a>

## 《論説》

## 誕生と即位

## —オスマン帝国における王権祝祭の文化と変容—

奥 美穂子

## 1. 問題設定

世界史上、時代や地域を問わず国を挙げて催された祝祭や祝賀行事は、時の君主あるいは国家権力を表象する機能を果たすものであった。このような祝賀行為の総称に「王権祝祭」の語句を用いるならば、オスマン帝国（1300年頃-1922年）には多様な形態をもった王権祝祭の文化が根付いていた。特に王族の人生儀礼の祝賀は、建国初期より「王の祝祭 Sûr-ı Hümâyûn」<sup>(1)</sup>と名付けられた行事によって盛大に催され、同国における王権祝祭の中核を担った。君主の子息・子女の誕生もその主たる契機となったが、当初これはあくまでも子どもが誕生した時点での祝賀であり、現在でいう誕生日のような特定の日に対して毎年の祝賀を伴うもの（以下、「年中祝祭」とする）<sup>(2)</sup>ではなかった。しかし19世紀にはいと、従来の「王の祝祭」とは別に、君主自身の誕生日を年中祝祭として祝う公的な国家行事が新設される。ほぼ同時期には、君主が即位した日を記念日として祝う年中祝祭も登場し、新たな祝祭形態が君主の権力表象の一端を担うこととなった。

この二つの年中祝祭を核とする、近代に登場したオスマン帝国の王権祝祭は、H. カラテケの研究によって近代祝祭の政治的意義を問う視座が提起されたことにより（Karateke 2004）、特に2000年代以降、新たな研究主題として注目されるようになった。しかしながら、これらの祝祭は近代のオスマン帝国に突如生まれたものではなく、上に述べたような伝統的に行われてきた「王の祝祭」に代表される王権祝祭や宮廷儀礼との関係とともに意義づけられるべきであると考えられる。

近年のオスマン帝国史研究において、前近代と近代との接合を考究する研究視座は「近世論」の問題として最も活況を呈する論題のひとつとなっている<sup>(3)</sup>。とはいえ、筆者が取り組む同国の祝祭研究では、前近代と近代との双方における王権祝祭を連続的にとらえる視点がこれまで希薄であり、他地域との比較研究なども含めた新たな枠組み構築が求められる段階にある。19世紀のオスマン帝国に登場した君主礼賛型の近代祝祭は、そのすべてが「西洋」からの「外圧」として導入されたものではない。本論文は上述した「近世論」における議論をふまえ、オスマン帝国に長く根付いてきた祝祭文化の素地に着目し、時代を超えた連続性と差異とを明確にすることを目的とする。

具体的には、オスマン帝国における国家主導の祝祭が各時代の社会情勢や宮廷事情、王権の在り方に応じて変容していく過程を明らかにし、特に、近代において新たに創設された二つの王権祝祭、すなわち君主の誕生日と即位記念日の祝賀について、オスマン帝国における祝祭史ならびに王権表象の観点に即して検討を加える。これにより、伝統社会から近代社会へと時代が変化していくなかで、同国の王権祝祭では何が引き継がれ、何が変化し、何が失われたのかを明らかにすることを試みる。

## 2. 祝祭・宮廷・政治：18世紀までの変容過程

王家が主宰した「王の祝祭」は、国を挙げての国家行事として時代に偏ることなく600年に及ぶオスマン帝国の歴史のなかで幾度も実施されていた。その数は確認ができたものだけでも150回を超える<sup>(4)</sup>。しかし、それぞれの実施契機に着目してみると、各時代における宮廷や政治、社会の状況に応じて、その意義は変化していたことがわかる。そこで本章では、オスマン帝国における王権祝祭の特徴を述べたのち、建国期にはじまり近代を迎えるまで、およそ14世紀から18世紀までの「王の祝祭」の変容過程を、各時代の宮廷および政治情勢の観点に即して概観する。

### (1) オスマン帝国の王権祝祭とその枠組み

「王の祝祭」の開催目的は、君主の子息・子女の誕生、王子の割礼・学問始め、王族女性（君主の娘や姉妹）の婚約・結婚といった王族の通過儀礼を主とし、外国使節の来訪、戦勝記念の際にも実施されたと説明される（And 2000: 27-45; Pakalın 1946, III: 278-279）。しかしながら、オスマン帝国にはこの他にも君主の王権表象にかかわる儀礼や祝祭が複数存在した。

表1は、オスマン帝国の王権儀礼および王権祝祭の枠組みを、3つのカテゴリーにわけて図式化したものである<sup>(5)</sup>。既述した(A)「王の祝祭」のほかに、(B)新君主の即位時に行われる即位式や先代君主の葬儀<sup>(6)</sup>、他地域で戴冠式と呼ばれるものに相当する帯剣式 *Kılıç Kuşanma*<sup>(7)</sup>、そして(C)宗教関連の行事としてイスラームを代表する二つの宗教祭 *Bayram*（犠牲祭と砂糖祭）、君主による金曜礼拝 *Cuma Selâmlığı*<sup>(8)</sup>、預言者ムハンマドの生誕祭であるマウリド *Mevlid* (Durmuş 2004)、君主主導の巡礼奉納行列 *Surre Alayı*<sup>(9)</sup>などが挙げられる。これらの儀礼行事は、「王の祝祭」の範疇に含まれないものの、時に祝祭や行幸を伴うかたちで実施され、君主の威信を世に示す重要な機会となった。

一般に王権祝祭の核となることの多い即位関連の諸儀礼が、オスマン帝国の場合には「王の祝祭」と別のカテゴリーに類別できる点に特徴がある。オスマン帝国において、特に古典期とも称される16世紀末までの時代に限って言えば、前君主の死は公に隠ぺいされたなかで次期君主の即

位への動きがすすめられた。そして、一人の王子が宮廷において後継者として確定されたのち、王権の安定のために、その他の王子らが、世に言う「兄弟殺し」の慣習<sup>(10)</sup>にならって亡き者とされた。前君主の葬儀は、その後によく敢行されるものであった。そのため、たとえば16世紀末の君主であるムラト3世（在位1574-95年）は「王の祝祭」史上最も盛大な祝祭のひとつである1582年の割礼祭<sup>(11)</sup>を主宰した君主であるが、このムラトが即位する際には、同時に5人の王子が殺害された。慣習に従って処刑された王子の葬儀と埋葬が済まされると、続いて執り行われる即位式に参列するために次々と廷臣が宮廷に集結した（Selânikî 1970: 128-129）。この時、参集した廷臣たちは皆喪服を着ていたという（Ertuğ 1999: 73）。つまり、新君主は喪中にて自身の即位式を遂行し、その数日後に粛々と先代の葬儀を執り行った。そこに華やかな祝賀ムードは、なかったといえる。

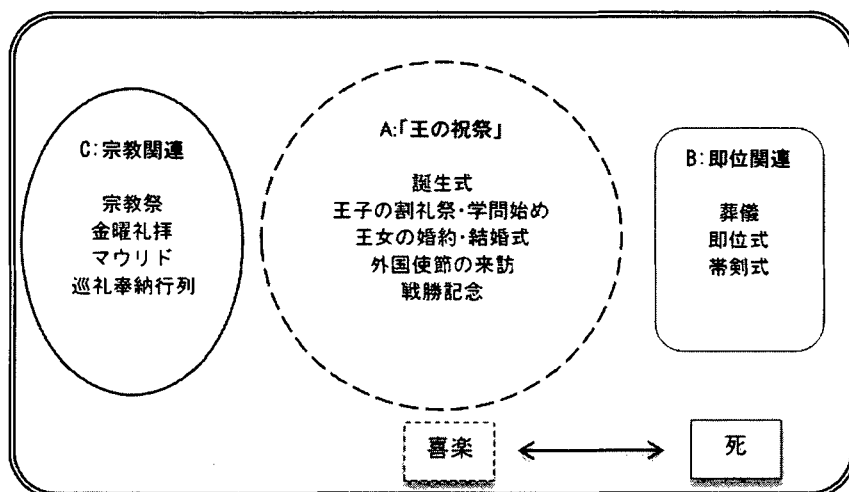


表1：オスマン帝国における王権儀礼・祝祭

\*筆者作成（奥2009で提示した図に加筆・修正したもの）

即位の儀式を終えた後まもなく実施されるのが、帯剣式である。帯剣式はイスタンブール城壁内、金角湾奥付近に位置するエユップ・スルタン・モスクに参詣し、執り行われるのが習わしであった。基本的な流れとしては、君主が宮廷から廷臣を率いて出立し、主に海路によってエユップへ向かい、王権の象徴となる剣を受けた後、帰路は陸路にて宮廷へ戻った。この道中では、新しい君主の名が刻まれた硬貨が恩恵としてばら撒かれ、施しの肉が人々にふるまわれた。また、宮殿の前では新君主に宛てた請願書の受付が行われた。とはいえ、この形式は時代によって異なるものであり、特に16世紀以前の帯剣の様子にかんしては史料上においても詳しい記述が残されておらず、エユップ参詣は確認されるものの実際にその帯剣の儀が慣習的に行われていたかどうかは

不明であるという。

たとえば、年代記『セラーニキー史』<sup>(12)</sup>の記述によれば、モスクで剣を受けることよりも、エユップ周辺に点在する歴代君主の墓廟参拝を主たる目的としていたとみられる。前述したムラト3世の場合は、即位14日後にエユップを海路にて訪れ、その帰路には陸路にて街を練り歩きながら先祖代々の廟を詣でたと記される (Selânikî 1970: 132-133)。すなわち17世紀以前の帯剣式は、エユップへの参詣として、新君主の御披露目が行幸としておこなわれ<sup>(13)</sup>、各廟に眠る歴代君主への即位報告が儀式化されたものといえるだろう。

誕生、即位、戴冠、葬儀という君主や王族の人生儀礼は、多くの場合ひとくくりに「王権儀礼」として研究されている。しかしながら上述のとおり、オスマン帝国においては、即位に関わる一連の儀礼は、「王の祝祭」として祝福される人生儀礼とは別のものとして認識されていた。この枠組みの区分は史料上で成文化されたものではないにしろ、あためて「王の祝祭」の定義を考えてみた場合、「死」と「喜楽」という対比概念に着目できるのではないかと筆者は考えている。すなわち、即位や帯剣式および墓廟の参詣は、祝福を伴う一方で必ず先代君主の死があり、加えて「兄弟殺し」が実施された場合にはより多数の死が背景としてかかわってくる。このために、即位や帯剣式は純粋な慶事とは区別され、その結果「王の祝祭」として扱われなかったと推察する。

これまで「王の祝祭」とその他の王権祝祭とのカテゴライズにかんしては、特段議論されることもなかった。しかし、「王の祝祭」の定義や開催契機の特徴を明確にすることは、オスマン帝国における王権祝祭を包括的に理解するために重要な作業であると考え<sup>(14)</sup>。「Sûr」は本来ペルシア語で「祝宴」を表す語句である。喜びや娯楽が織り込まれる「王の祝祭」に対し、次章で再度議論の対象とする即位そのものの祝賀行事は、伝統的な「王の祝祭」に含まれていなかったことを、あらためてここで確認しておきたい。

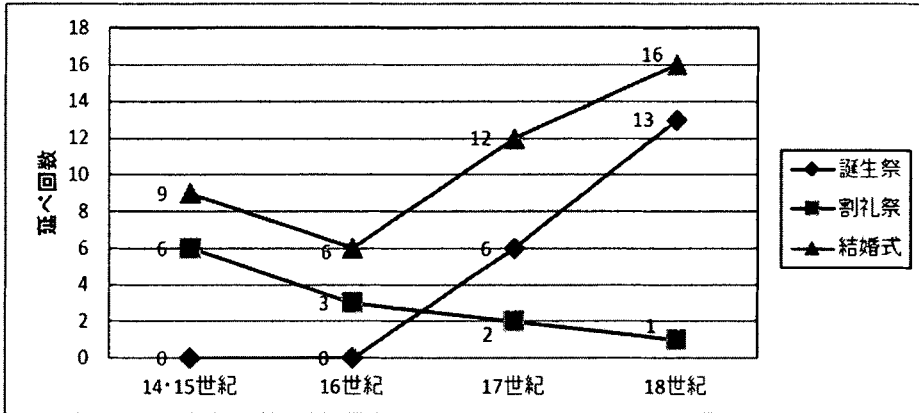
## (2) 前近代オスマン帝国における王権祝祭の変容

次に、「王の祝祭」のなかでも主たる開催契機となった誕生、割礼、結婚の祝賀に焦点を当て、それぞれの政治的 중요性と時代背景との関係を検討する。

表2は契機ごとの延べ開催数の推移を示したものである。まず、建国初期に当たる14-15世紀の「王の祝祭」は、男系王族の結婚式が中心であった。アナトリアの地で台頭したオスマン侯国の君主や王子はビザンツ帝国をはじめとする東西周辺諸国の王族から妻を娶ることで、その権力基盤の地固めを進めた。新興国がひしめく戦乱の世において、その一侯国であったオスマン侯国は、婚姻政策をもちいて自国の権威とその支配の正統性を強化していったのである。その過程で行われた男系王族の華やかな結婚の宴は、臣下や周辺国にその権威を示す重要な場となった。たとえば、ムラト2世の治世下にあたる1450年には、王子メフメト(のちのメフメト2世)とドゥ

ルカドゥル侯国の君主スレイマン・ベイの5人の娘のうちの1人シッティ・ハトゥンとの結婚を祝う祝祭が行われた。その詳細は不明であるものの、当時の首都エディルネで3ヶ月間、祝祭が続いたと伝えられ (Purgstall, II: 561)、「王の祝祭」史のなかでも最長を誇る。

表2:「王の祝祭」の契機別開催数



\*筆者が諸文献のデータを参照し、算出した数値より作成。データ典拠は註(4)を参照。

初期の時代の結婚式がすべて男系王族の結婚の祝賀である点は、この時代に限った重要な特徴であるといえる。なぜならば、16世紀以後のオスマン帝国の君主は、王子期も含めて、特定の女性と正式な婚姻関係を結ばなくなるからである。君主と子をもうける女性は基本的にハレム（後宮）から選ばれるようになり、君主との間に男子を一人生んだ女性は、ハセキ Haseki の称号を得るとともに君主のもとから退けられた<sup>(15)</sup>。周知のように、ハレムで暮らす女性たちは皆、領土拡大が進められるなかで多方面から集められた様々な出自を持つ女奴隷であった。ハレムの女性たちとの間に君主の子息・子女が誕生することで、必然的にオスマン王家の混血が進んだことは言うまでもない。この慣習自体は、生母の出自を不問とするイスラーム的価値観の一面としても見ることができるが、特にオスマン帝国の場合には特定の家系が王族と姻戚関係を持つことを防ぎ、初代オスマンから引き継がれる家系の永続と安寧を保持するための有効な策となっていた (Işık 2016: 137)。この慣習は帝国末期まで引き継がれ、様々な「危機」を乗り越えつつもオスマンの「万世一系」は保たれた。

上述のとおり、15世紀までの王権祝祭の主軸を担った男系王族の婚礼の祝賀は、公的に実施されることはなくなった。したがって、表2の中で示された16世紀の6回の結婚の祝賀は、1回の婚約式を含め、すべて君主の娘、すなわち王族女性に関わるものとなる。その一方で、男系王族にとって生涯における最も重要かつ華やかな人生儀礼は、総じて王子期に経験する割礼の儀となった。ゆえに王子の割礼祭は、後の後継者の公的な御披露目の場として、より国政に直結した重

要な王権祝祭へと昇華した。この時代を代表する王権祝祭としては、スレイマン1世期（在位1522-66年）の二つの割礼祭（1530年、1539年）と、スレイマンの孫にあたるムラト3世が主宰した1582年の割礼祭が挙げられる。3回と数は多くないが、それぞれが年代記に記録され、重要な国政行事として後世に伝えられた。特に上述の1582年祝祭では、内外から来賓が招かれ、帝都イスタンブルで50日にわたって「王の祝祭」史上、最も際立った規模で実施された。その大規模開催の背景には、ハレムの伸長と内紛による後継者の事実上の公示といった政治的思惑や、社会不安・経済状況の悪化に対する不満解消や経済的テコ入れといった複合的要因が絡み合う（奥2006; 2009; 2013）。王権祝祭は、まさに時代を反映する鏡であったといえよう。

続く17世紀から18世紀には、大宰相を中心とする官僚組織が国家運営を主導する時代へと移行行く。オスマン官人たちの社会的特権は、より象徴的なものとなった君主と王家の威光のもとで、引き続き保持された。そしてこの時代にみられた王権の変化は、「王の祝祭」の開催にも大きな影響を与えている。表2で示した統計をみると、割礼祭の数が低下する一方で、結婚式と誕生祭の数が一気に増加する。そのうち後者の誕生祭は、王族の子息・子女の誕生を祝う公的な祝祭として、17世紀にはじめて実施された新しい祝賀であった。オスマン史上で最初に確認できる誕生祭は、1604年にアフメト1世（在位1603-17年）に息子オスマン（後のオスマン2世）が生まれたことで開催された、7日間の祝祭である（And 2000: 37）。

このような祝祭開催にみられる変化については、16-18世紀における祝祭と宮廷との関係を論じたA. オナルが、王位継承と王子を取り巻く慣習の変化が、17世紀以降の誕生祭に政治的重要性を与えたことを指摘している（Önal 2012）。この王子位制度と君主後継の慣習の変化とは、次のようなものである。まず、16世紀まで行われていた、王子が行政の実務経験を積むために県軍政官 *Sancak beyi* として地方に派遣される、いわゆる「地方修行」の慣習が失われ、その結果、王子たちは皆帝都イスタンブルで事実上の幽閉生活を送ることとなった。さらに、17世紀に入っただけで、アフメト1世の治世以降には、新君主即位時の「兄弟殺し」が段階的に行われなくなり、王子間の王位継承争いが事実上消滅した（Baysun 1941: 161-164）。このため17世紀以降の王位継承のかたちは、官僚主導のもと、男系王族による年長者相続へとシフトしていく。これを機に、次期後継者としての王子たちに向けられる政治的注目度は急速に低下することとなった。これは「王の祝祭」の観点でみれば、王子の割礼祭が国政上の重要性を失うことを意味した。「誕生 *Veladet*」を祝う新たな王権祝祭は、このような政治変化を背景に登場したものといえる。

たとえば上述のとおり、王子が「地方修行」に出なくなったことにより、男系王族は皆、帝都に居を構えることになった。そのため、必然的に王族の子どもはすべてイスタンブルで生まれるようになり、王族の「誕生」の把握が可能かつ容易となった。上述のオナルも指摘するように、そもそも王子が地方各地で自身のハレムを持っていた時代に、そこで誕生するすべての子どもを

把握し、中央で祝うことは実質不可能であった。なによりも誰が王位を継承するののかも不明な段階で公に御披露目をしたり、それを中央の宮廷史家が後世に残る公的な史書に記録したりすることには、なんの政治的意義をもたなかったのである (Önal 2012: 22-28)。

同時に、子どもの誕生の不規則、不安定化という新たな問題も浮上した。王位継承の際の「兄弟殺し」が行われなくなった代わりに、前任者の王子たちは皆、ハレムの一角にある「鳥かご Kafes」と呼ばれた場所に幽閉されることになった。この「鳥かご」にいる間、王子たちは子どもをもつことは許されなかったという (Önal 2012: 42-43)。幽閉期間が長期化するなかで、精神疾患を患う者も少なくなかった。また、後継の順序が不規則になったことにより、即位が年齢的に遅くなる君主も登場し、いわゆる「晩婚化」のケースも出てきた。以上のような要因が重なったことにより、王族の子ども誕生は「当たり前のこと」ではない、非常に稀で貴重なものになってしまったのである<sup>(16)</sup>。17世紀にみられた王子位と後継制度の変化は、皮肉にも王家の血統断絶という重大な問題をはらむことになった。それゆえ、このような不穏かつ緊張した雰囲気なかでの子息・子女の誕生は、いっそうの熱気をもって迎えられ、王族誕生を祝う祝祭が国を挙げて盛大に催されることとなったのである<sup>(17)</sup>。

この時代に表2中で数を延ばす「結婚式」にも言及しておきたい。これらはすべて16世紀と同様に、女性王族の結婚にかんする祝祭であった。17世紀以降、君主自身のカリスマ的な求心力が失われていく中、王家と有力な廷臣との結びつきが強化され、またそれが盛大な祝祭を通じて、公に示された結果であると考えられる。

17世紀に登場した王族誕生を祝う祝祭は、18世紀にさらに定着し、その重要性を増していった。あらためて、この文脈上で用いられる「誕生 Veladet」の語句を確認してみると、本節で述べてきた17、18世紀の「誕生」は、常に「君主の子ども誕生」を意味するものであり、その祝祭は、「王」あるいは「王家の」誕生を意味する「Veladet-i Hümâyûn」という語句で史料中に登場する。これに対し、辞書・事典あるいは先行研究で説明される同語句の定義をみても、異なる二つの意味によって混乱していることに気づく。すなわち、あるものは君主の子ども誕生<sup>(18)</sup>、あるものは君主自身の誕生日<sup>(19)</sup>と説明され、管見の限りでは二つの意味を併記するものは見当たらなかった。

次章で論ずる「君主の誕生日」の祝賀は、19世紀になって初めて同国に登場する近代の祝祭である。したがって、同語句の混乱はオスマン帝国における「誕生」が、時代によって異なった意味をもつこと、さらに言えば、「誕生」そのものの重要性が、18世紀以前に盛況であった「君主の子息・子女の誕生」から、近代における「君主の誕生日」へシフトした点が、十分に理解されていないために生じるのではなからうか。史資料を用いる際には、十分な注意が必要となる<sup>(20)</sup>。



### 3. 王権祝祭の「近代化」：君主の誕生日と即位記念日

本章では、近代において新たな「誕生」と「即位」の祝祭が創出され、展開した過程を検証する。オスマン帝国近代史における王権祝祭研究は、近代帝国論に位置づけられる国家権力の正統性と国民統合の問題として<sup>(21)</sup>、上掲のカラテケによって示された総合的な研究をベースに、特にアブデュルハミト2世期（在位1876-1909年：ハミト期）の事例を中心に研究が重ねられている。たとえば、N. アイユルドゥズの単著は題目のとおり、ハミト期の宮廷儀礼を網羅的に扱ったものであり、補遺として付された多数の史料が有益である（Ayyıldız 2008）。M. ギュナイドゥンは主にカラテケの研究に依拠しつつ、ハミト期の王権祝祭に焦点をあてた論稿を発表した。主題には誕生日の祝賀と掲げられるものの、同治世期におけるその他の儀礼の動向にも紙幅を割いて整理が加えられている（Günaydın 2014）。F. デミレルも同様にハミト期の君主誕生日の祝賀に着目し、同祝賀が当時の王権表象のツールとしていかに機能したかを論じた。特に新聞史料の分析を軸とし、当時の報道メディアが果たした役割や、記事を通して国内外の祝賀が呼応する様を明らかにした（Demirel 2014）。

このように、ハミト期の祝賀事例には先行研究が多いため本稿ではその詳細は割愛するが、実際ハミト期の王権祝祭は制度的にも確立し、成熟期に達したものと評価されている。しかしこれはオスマン国内に限った傾向ではなく、いわゆる「帝国主義の時代」が始まったとされる1870年以降、各国が競ってプロパガンダとしての王権祝祭を盛大化、大衆化、そしてより儀礼化した時代と重なる<sup>(22)</sup>。このような共時的な国際社会の潮流の一事例として、近代オスマン帝国の王権祝祭の隆盛を考える必要がある。

また、ハミト期に個別研究が偏重する傾向にある一方、オスマン帝国の近代祝祭がハミト期に突如登場したものではないことも忘れてはならない。古来の伝統的な祝祭文化を基盤としつつ、西欧化政策のなかで中央集権改革がすすめられたマフムト2世の時代（在位1808-39年）より、新たな祝祭創設の段階的な動きが確認される。実際に史料上にも、その治世期より年中祝祭としての君主誕生日と即位記念日の祝賀を意味するものとして、「誕生 *Veladet*」と「即位 *Cülûs*」の語句が対となって登場し始める。したがって、近代祝祭の萌芽となったマフムト2世期にさかのぼり、ハミト期に至るまでのプロセスを、先行研究から知見を得つつ史料に即して検討してみたい。

#### (1) 君主誕生日と即位記念日の新設：マフムト2世期を中心に

マフムト2世の時代には、なおも君主の子どもの誕生や王族女性の結婚を祝う従来の伝統的な「王の祝祭」が催されていた。1836年までに8回の誕生祭が確認でき<sup>(23)</sup>、そのうち1834年の結婚の祝祭、1836年の結婚と割礼の祝祭<sup>(24)</sup>ではそれぞれ3冊ずつもの『祝祭の書 *Sûrnâme*』が作成

された<sup>25)</sup>。しかしこの時代には、外国君主のための祝賀行事がオスマン帝国領内で催されるという事例が確認され始める。というものの、すでに当時の西欧諸国では国威発揚としての君主の誕生日と即位日を祝う年中祝祭が積極的に行われており、近代国際社会における各国間の重要な外交儀礼として、より大きな展開をみせていた。その方法は、当該国内にとどまらず、在外大使館や各港に停泊する自国船舶への装飾や、要人らの大使館表敬訪問、祝砲の発射など、自国領以外での祝賀行為が慣行されていた (Cevdet 1980: 41)。1812年にはイスタンブルの港、すなわちまさに君主の御座所の面前において、イギリス国王<sup>26)</sup>の誕生日のために祝砲が放たれた (HAT 243/13694)。在イスタンブルのイギリス大使はこの公的儀礼を遂行するために、イスタンブルの金角湾内にあるイギリス船舶からの祝砲発射の許可をオスマン政府に求めた。この案件は勅旨によって認可が与えられたものの、当時のオスマン帝国はこれに相当する外交儀礼を持ち合わせていなかった。あとで詳述するように、同国の祝祭文化には君主を対象とした祝賀が即位儀礼以外に存在しなかったからである。このような状況のなか、次第にオスマン側でも「儀礼の国際化」への対応として、君主の誕生日を祝う祝賀行事を実施する機運が高まったものと考えられる。当初オスマン帝国で行われた君主誕生日の祝祭は、君主や高位高官らがモスクに出向き、モスク内で預言者ムハンマドの誕生と徳をたたえるマウリド頌歌を詠むというかたちで実施されたようである (Karateke 2004: 40-41)。すでにイスラーム社会に根付いていたムハンマドの誕生を年中行事として祝うマウリドと、君主の誕生日という祝賀行事との間に、「誕生」という共通点を見て、このような祝賀形態を試みたものと推察される。しかし、この形態で行われた君主誕生日の祝祭は宗教儀礼の要素が強く、外国君主や大使の参加は難しかったという (Cevdet 1980: 41)。ゆえに、君主誕生日の祝祭は、この段階では当時求められていた外交儀礼の役目を果たすには至らなかった。

その後、祝祭の整備は徐々に進められ、先に登場した君主誕生日の祝賀に続き、マフムト2世の治世晩年には即位記念日の祝賀も執り行われるようになった。当初は一種の宗教祭のように、夕刻の祭として祝われていたようである (Karateke 2004: 43)。灯がともされ、街は光で飾り立てられた。1831年には同年の即位記念にあわせて、官報である「諸事曆報 *Takvim-i Vekâyi*」も刊行されている (Günaydin 2014: 91)。このように、新たに誕生した王権祝祭は以後官民のメディア媒体を通して国内外への周知徹底が推進され、より開かれた国家行事として体裁が整えられていくことになる。

同時代の修史官年代記である『リュトフィー史』は、マフムト2世期の推移について次のことを伝える。君主の誕生日と同様に、即位記念日も祝賀行事として実施することが決定され、ヒジュラ暦1252年ジェマーズィルアフル月4日(1836年9月16日)に即位記念の祝賀が開催された。そして、毎年即位記念日には硬貨の日付が刷新されることが慣習となり、祝賀のために準備に

携わった者たちへ与えられた。のちに、この慣習は儀式の典範に加わった(Lütfi 1999, V: 885-886)。ここで記念日とされた日付に着目すると、マフムト2世の即位日は、まさにヒジュラ暦1223年ジェマーズィルアフル月4日(1808年7月28日)であることから、この時点ではヒジュラ暦を基準に祝祭日が設定されていたことがわかる。

続く1837年の勅旨(HAT 684/33242)では、宗教儀礼の要素が強かった君主誕生日の祝賀の西化が検討された。大宰相からは次のような進言がなされた。

(前略) この要件 [である君主誕生日の祝賀] が、ヨーロッパ諸国家で通用している元々の状況を、外務大臣閣下によって問われたところの、フランス王 (kiral) の誕生 [日] ならびに王の即位 [日] にあたる夜々においては、単に王の諸宮殿や王族の諸邸宅、そして宮廷に属する人々の家々、そして領内各地、廷臣たちや諸大使一団、仕えの者らその他の役人によって、いくつかの敬愛の言葉が飾り添えられるのではありません。[より広く社会から祝福がなされるのです。] そして、イギリス君主 (bey) は、これほどまでに一般化され [普及す] ることはなく、より簡略化しているのですが、壮麗さがさらに注視されること、そしてその諸方法もまた王の公式の王冠あるいは御名にまつわる、あるいは自身の国家に特別な契約方法のような、いくつかの種類のものから成り立っている諸概念によって明示され [るのです。] そしてこの理由より、皇帝陛下の庇護によって、パリの様式として、このような壮麗な事柄が全ての聖俗両臣下の家々に一般化され [普及す] ること、またイギリスのように、完璧なまでの壮麗さとなることに注視し尽力がなされることは、その諸方策が [祝賀の] 壮麗さを保証することになるのです。(後略)

このように、大宰相は英仏の状況を参考に好ましいとされる点を取り入れながらオスマン帝国においても両祝祭を西欧型に整備し、実行することが望ましいと提案した。これに対し、君主からの同文書上での返答では、英仏に加え、ロシア、ハプスブルク帝国期にあるウィーンでも同様の情報がある。オスマン帝国でもそれらに倣った形での実施に向け準備がなされるよう、もし間に合わなければ、直近の祝賀は従来通りの飾りつけによって宗教祭の後で実施されるように<sup>(27)</sup>、と命令が下された。

さらに翌年1838年の勅旨(HAT 1187/46763N)では、「完璧なる陛下の幸福な誕生 [日] と、習わしである陛下の喜ばしき即位 [記念日]」<sup>(28)</sup>の祝賀が、帝国内だけでなく在外の大使館でも実施されるようになったとあり、ここでようやく双務的な外交儀礼としての体裁が整えられたことがわかる。このように、タンズィマート改革期(1839-76年)に先立つ1836年から数年の間に、新たな二つの王権祝祭が当時の「国際基準」にあわせるかたちで整備されたことが明らかとなった。

## (2) 祝賀の公式化と「国際基準」への適合

即位記念日の祝賀はアブデュルメジト1世期（在位1839-61年）において、より多くの人々が参加する、社会に定着した祝祭になったという（Günaydın 2014: 89）。君主の誕生日の祝賀についても、この頃には諸外国に認知され始め、海外より祝賀の意が伝えられるようになっていた<sup>(29)</sup>。アブデュルアズィズの時代（在位1861-76年）には、さらに「国際基準」への適合にむけた検討、調整が進められた。1861年付けの公文書史料（A.MKT.UM 521/77）には、毎年6月13日に即位記念祝賀を行うようにするとある。この「6月13日」とは、換算すると太陽暦に基づくオスマン帝国の財務暦 *Malî sene*<sup>(30)</sup>に依拠した日付であることが確認できる。すなわち、これまで両祝賀日ともに太陰暦であるヒジュラ暦を基準に祝日が設定されていたが、1861年に初めて太陽暦に依拠した年中祝祭日が誕生した。

カラテケは、このアブデュルアズィズの時代に君主誕生日の祝賀と即位記念日が共に公式祝賀化されたと述べている（Karateke 2004: 40）。その内容を鑑みると、アフメト・ジェブデトによる『上奏 *Ma'rûzât*』にある、「廷臣の儀 *Rikab-ı Hümâyûn*」と呼ばれる儀式に君主誕生日と即位記念日が加えられ、宗教祭は除外された、という記述に依拠したものと思われる（Cevdet 1980: 41）。「廷臣の儀」については今後検討を要するが、君主の御前に重臣が集まる最高レベルの公的儀礼として、この時期に生まれた新たな王権儀礼の枠組みであったものと理解できる。このように、「国際基準」に則した祝祭を制度化することで、当時の外交儀礼に双務的な立場で参入できるよう、アブデュルアズィズ期に具体的な対策が進められた。以上の過程を経て、オスマン帝国における君主誕生日と即位記念日の祝賀は、19世紀後半のアブデュルハミト2世の時代に大規模化され、内外にむけた新たな王権表象の場としてより一層政治的重要性を増していくこととなる。

## 4. 伝統と近代：継続と変化にみる歴史的意義

ここまでオスマン帝国における王権祝祭の変遷を、特に誕生と即位とに着目しながら通時的に検証を行った。特に19世紀には、当時の西欧主導による国際社会で影響を持った儀礼慣行に対応すべく、大きな変革がなされたことを確認したが、同時にこの新たな近代祝祭のなかにも、オスマン帝国に以前から存在していた祝祭文化が引き継がれていた点を見逃すことはできない。本章では本稿の総括を兼ね、オスマン帝国の王権祝祭において、何が継承され、そして何が新しく導入されたのか、その歴史的意義を考察する。

### (1) 伝統的な音と光の祝祭文化：祝砲、イルミネーション

19世紀に展開した近代祝祭では、祝砲が放たれ、街には灯によるイルミネーション装飾が施さ

れた。このような祝賀方法は、以前よりオスマン帝国の祝祭のなかで培われてきた文化に通じている。以下、音と光という二つの要素に沿って、文化の連続性という観点から検討を加える。

### ① 音による祝賀：祝砲

一つ目に挙げるのは、祝砲である。もともとオスマン帝国には君主や王族、さらには国家にかんする公行事や祝賀の際に大砲を発射するという慣習があった。オスマン帝国はイスラーム世界においていち早く本格的に火器を導入した国であり、その戦術変化の影響は軍や国のシステムにまで大きな影響を与えた（宮武 2004）。1453年のコンスタンティノープル攻略の際にハンガリー技術者ウルバンの大砲が攻城の要として、その勝敗を分けたことは、つとに知られている。15世紀末から16世紀にかけては海軍の増強にも力がそそがれ、艦船に火器が搭載されるようになったことで船の改良も進められた（宮武 1991）。一方で、戦闘の場面ではなく、儀礼行為として何かを伝達したり、祝賀の意を示したりする「音の道具」としても大砲が用いられるようになっていく。たとえば、戦時以外の主な大砲の使用について論じた M. ユルドゥズの整理によれば、主に①諸宗教祭で礼拝や断食に際して時を告げる役割、②君主行幸の送迎時、③宮廷付船舶の進水式、④君主の子息・子女の誕生、⑤軍の出征と帰還、⑥君主の即位、⑦勅旨の拝受、に際して、大砲が放たれたという（Yıldız 2009）。人々は君主の姿を直接見ずとも、音によってその動向を知ることができたのである。なお、ユルドゥズが示した事例はすべて17・18世紀のものである。管見の限りではあるが、16世紀における「王の祝祭」では上記のような大砲の使用事例はみられない（奥 2010）。また、18世紀以降には文書史料上で王族の子息・子女の誕生を祝う祝砲のための火薬調達にかんする記述が複数確認できた<sup>(31)</sup>。特に本稿の主題に沿った事例を挙げると、上掲④の子息・子女の誕生については、男子誕生には7発、女子の場合は3発といったように、性別や何人目の子どもであるかが主に奇数による号砲数によってあらわされ、吉報の触れ役とともに人々に伝えられた。18世紀後期にあたるアブデュルハミト1世期（在位 1774-89年）には、子どもが多く誕生したため、そのすべてで祝祭を開催せず、祝砲のみで祝うこともあったという（Cevdet 1891, II: 100; And 2000: 38）。以上のことから、大砲の発射という「音」を用いた祝賀の慣習は、17世紀にはじまり、18世紀においては既にオスマン社会の様々な場面において定着していたといえる。

この祝砲の文化は近代以降も引き続き同国の祝祭や国家儀礼の場面で用いられていくが（Batmaz 2007a）、その実施形態は19世紀をつうじて段階的に整備された同国の『帝国海軍法令集 Bahriye Kânûnnâme-i Hümayûn』のなかで厳格に規定されるに至る（Batmaz 2007b）。公的な外交儀礼として国際社会で統一された礼砲儀礼は、オスマン帝国においても当時の「国際慣例」に則って実施されることとなった。特に最高礼を示す号砲数は各国ともに21発に統一され<sup>(32)</sup>、こ

の数字は現在に至るまで効力を保持している。同時代となる明治期日本の事例においても、1868年の天皇誕生日の祝祭において21発の祝砲が導入されており（井上 1989: 65-67）、礼砲の慣習においても西欧主導で王権祝祭の世界的均一化が進められたとみることができよう。

## ② 光による祝賀：イルミネーション

二つ目に挙げるのは光、すなわちイルミネーションによる装飾文化 *Donanma* である。灯をともし、光で飾り立てるという祝賀方法は、洋の東西を問わず、時代を超えて人々を魅了する手法のひとつであろう。オスマン帝国においても、光の見世物は古くより祝祭の場で重宝された。

トルコ文化史を専門とする M. アンドは同国の光の見世物を、①花火 *Fişek* による見世物、②燈明 *Kandil* を用いたもの、そして③その他の光による見世物というように、大きく3つに類型化した（And 1982: 102）。特に視覚的演出効果の高い花火は祝祭に一層の華やかさを添え、当時の宮廷画家や外国人の見物客によって描かれた図像史料も少なくない。16世紀に行われた王権祝祭では既に花火の使用が確認でき、上述の1582年祝祭でも毎晩のように花火の見世物が催されている（奥 2013）。この当時の花火は上流階級のステータスシンボルにもなっており、祝祭時には提供者の名と共に披露されるものであった<sup>(33)</sup>。

花火と並んで夕刻の空を彩ったのが燈明である。燈明を灯すという慣習は、もともと宗教祭に際して行われることが多かったが、次第に様々な王権祝祭の場面においてもイルミネーションが施されるようになった。16世紀後半にはその原型らしきものが確認されるマフヤ *Mahya* 装飾は、光によって文字を表し、人々に宗教的なメッセージを伝えた（Bozkurt 2003）。現在でも断食月の夜にはモスクの尖塔の間に電光によって文字が浮かび上がり、幻想的な情景を作り出している。このような燈明によるイルミネーション装飾は、19世紀に登場した君主の誕生日や即位記念日の祝賀においても積極的に行われ、都市の様々な建物が灯によって彩られた。当時のイスタンブルは、近代化の象徴となる水道（1882年）、都市ガス（1888年）、電気（1910年）といったインフラ設備が徐々に整えられていった時代と重なるが、19世紀中期頃は依然として真っ暗な夜が残されていたという（永田・江川 2015: 266-267）。それだけに祝祭に際して都市全体が燈明で照らされた光景は、まさに「非日常」となって人々の気持ちを高揚させたことだろう。

マフムト2世の時代に初めて即位記念日が祝われたころ、住居を燈明で照らし、君主の花押を飾るといった行為は、古き時代の花火と同様に、一種の特権行為として一部の高位高官に限られていた（Karateke 2004: 43-44）。しかし、この祝祭が大衆を動員した国威発揚の場になっていくにつれて燈明飾りは解禁され、一般の参加も広く認められるようになった。アブデュルアジズの時代には手提げ提灯を持った人々が自発的に行進を行い、こぞって祝賀に参加したという（Demirel 2014: 262）。その一方で、国家行事としての均一性がより強く求められるようになると、徐々に

政府による統制も強められた。近代王権祝祭の成熟期ともいえるアブデュルハミト2世の時代には、君主をたたえる王権祝祭への一般参加はほぼ義務化され、地方の祝賀行事に対しても中央からの指導と監視が入るようになった（Karateke 2004: 44-45）。街のいたるところに灯や旗、あるいは「皇帝陛下万歳」と書かれた看板が掲げられ、定時には規則に則って、決められた数の祝砲が放たれた。このような一体となった雰囲気創りが出されるなか、国内外に向けたプロパガンダ効果は一層高められることとなった。

## (2) 近代祝祭が生み出した新たな文化

それでは、近代祝祭はオスマン帝国にどのような変化をもたらしたのだろうか。祝祭を通して確認される新たな慣習や概念という観点から、以下の3点を挙げてみたい。

1 点目は、王権祝祭の開催契機とその枠組みにかんする変化である。既に述べたように、伝統的なオスマン帝国の祝祭文化において、「王の祝祭」と即位関連儀礼とは別の枠組みに置かれていた。本稿では、特に後者が王族の死や墓廟参拝などと関連が深い、「死」を連想させる喪中の状況に近い儀礼分類であったと提起した。しかし、19世紀以降に生まれた「即位記念日」という新たな祝賀は、決して「死」のイメージを連想させるものではなく、威信発場の場や国民統合的機能を持った王権祝祭の核となり盛大に祝われるものとなった。この新しい即位の祝賀が同時期に登場した君主自身の誕生日を祝う祝祭と一対のものとして議論された経緯を鑑みても、「死」と「喜劇」という二つの対局概念は、もはや近代において同国の王権祝祭の枠組みを特徴づける要素ではなくなった。即位そのものと深いつながりのある王子位の制度や王位継承の慣習が時代を追って変容していくなかで、同国における即位の意味合いもまた大きく変化することとなったといえる。同様に、「誕生」という契機についても、従来「君主の子息・子女の誕生」のみが祝賀対象であったのに対し、「君主の誕生日の祝賀」が新たに外交儀礼の要として創設され、政治的重要性も後者に大きくシフトした。

このように、以前存在した祝賀慣習から新たな祝祭が派生した経緯は、2点目に挙げられる祝賀対象の変化と連動させて考える必要がある。従来の「王の祝祭」では、特に男系王族の婚姻慣習が無くなった16世紀以降、君主自身は直接の祝賀対象になることはなかった。つまり、誕生、割礼、学問始め、そして婚姻の祝賀は、すべて王子や王族女性の人生儀礼を対象としており、君主は常に主宰者として祝祭の頂点に君臨するのみであった。そして、その圧倒的立場から、社会全体に向けて慈悲と恩恵を下賜し、自身の絶対性を知らしめたのである。これに対して近代に誕生した王権祝祭では、君主の誕生日や即位日の祝賀に代表されるように、君主個人を直接称え祝うことが政治的に重要な意味を持つようになった。

この背景には内外にみられる二つの理由があると考えられる。ひとつは内的要因として、オスマン

帝国における君主と王家そのものの実質的権威の衰退が挙げられる。君主の即位や退位のタイミングは、もはや官僚や軍の思惑や社会変革によって左右される不安定かつ流動的なものとなっていた。加えて19世紀末にかけて同国が直面した財政窮乏もまた、国家、そして王権の失墜に少なからず影響を与えたものと考えられる。ハミト期直前にあたる1875年、オスマン財政は事実上破産した。累積した債務や賠償金の支払いのため、1881年には債権国である西欧列強が主導するオスマン債務管理局が設立され、国家財政はその管理下に置かれた。このような状況下において、君主を頂点とするオスマン帝国の王権は、国家統合と存続の核であり続けるためにも、国内外に対して、より象徴的かつ揺るぎないものとして意図的に「維持」され、より視覚的にアピールする必要に迫られていたのである。

その王権維持の方策に影響を与えたのが、二つ目の要因にあたる外的影響、すなわち、当時の国際的慣行となっていた君主礼賛型の国家儀礼の導入であった。緊密化する国際情勢のなか、双務的な外交儀礼への参入は必須であり、西欧式のしきたりに対応した新しい形の王権祝祭がオスマン帝国でも早急に整備されることが求められた。たとえば、これと同様の動きは、先に挙げた明治期日本においても確認することができる。もともと日本では天皇の誕生日を祝う慣習が古くは奈良時代より存在していたというが、これは社会全体に公開されるものではなく、天皇家において内々に祝われる宮中儀礼であったようだ（鶴沢 2008）。しかし、天皇を中心とした国家の中央集権化を進める明治政府は、欧米への協調政策の一環として、1868年に天皇誕生日を国民全体の祝祭日として制定した。「万国帝王ヲ祝スル通例ノ礼儀」として、主にイギリス型の儀礼様式を手本に整備された天皇誕生日は、政府主導のもと日本各地で実施が推進され、次第に全土に浸透、定着するに至る（井上 1989）。国民統合のシンボルとして、王権祝祭を通じて国家元首が可視化され、国を挙げて演出する方法は、「西洋」の受容とともにこの時代における有力な国家戦略のひとつとして世界に拡散されていったといえよう。

最後に3点目の変化として、時の認識について触れておきたい。近代オスマン帝国において新たに創設された王権祝祭では、宗教祭以外で初めて年中祝祭という概念が導入された。これは誕生日と即位記念日という君主個人とその治世を礼賛するために、毎年「時」を数え足していくという、もともとオスマン社会には存在しない発想であった。アブデュルハミト2世期の1900年には、即位25周年と共に建国600年を祝う記念祝賀も行われた（Karateke 2004: 45; Günaydın 2014: 83）<sup>14)</sup>。オスマン社会にとってこのような祝賀契機は、真新しいものであったに違いない。国内外の人々が同時に王権を想起する機会を定期的に生み出すこととなった年中祝祭は、毎年繰り返される新たな王権表象の場として、近代国家が目指した国民統合と中央集権政策の一翼を担う重要なツールになったのである。

さらに、よりマクロな視点で「時間」の問題を考えるならば、19世紀のオスマン社会は、国務



や就業、教育の場といった、人々の日常生活の中に「西洋」式のパンクチュアルな時間概念が徐々に取り込まれていった時代であった。街には時計台が据えられ、日の出・日没を基準とする従来の「アラトゥルカ（トルコ風）」から、「アラフランガ（ヨーロッパ風）」と呼ばれた西欧型の日付・時刻認識への移行が進められた（江川 1998: 8-9；永田・江川 2015: 314；Wishnitzer 2015）。年中祝祭は、まさにこのような時間認識の「西洋」化のなかでオスマン社会に出現した様式であった。近代祝祭の導入初期にみられたヒジュラ暦から太陽暦への移行を含め、同国の祝祭日の設定についてもこの視座のもとで引き続き検討を重ねていきたい<sup>(35)</sup>。

## 5. おわりにかえて

オスマン帝国の王権祝祭は、各時代における国内外の社会状況に対応しながら、その形態や意義を変えて、展開し続けた。その形態は伝統的祝祭文化を受け継ぎながらも、19世紀には新たな近代的要素を取りこみ、アブデュルハミト2世期において一旦のピークを迎えることとなった。特に、君主の誕生日と即位記念日を祝う祝祭は、国威発揚のみならず重要な外交儀礼として特別な意味を持ち、「国際基準」に則った祝賀が国を挙げて盛大に実施された。しかし、君主と国家の権力表象を担った王権祝祭が大規模化したハミト期という時代も含め、19世紀のオスマン帝国は西欧列強の圧力に直接対峙した非常に厳しい状況に晒されていた。次々に進められた諸改革や度重なる戦争により帝国の財政危機が一層深刻化するなかで、典範化された多くの行事を次々に実施することは決して容易ではなかった。実際に火薬の調達もままならず、ハミト期末期には祝砲数の削減や空砲による代用、花火の打ち上げ停止といったイルミネーションの縮小が実行に移された（Batmaz 2007: 36-37）。戦況によっては、勅旨 *İrade* によって祝賀行事の停止が公示された時期もあったという<sup>(36)</sup>。ゆえに、続く第二次立憲政期以降（1908-22年）は、一転して祝祭の縮小と儉約が進められ、1922年に同帝国は長い歴史を閉じることとなる。

本稿では祝祭の場を王権祝祭という権力者側の立場に立って検討したが、視点を変えて、祝祭の舞台となった都市や、参加者として祝祭を動かした大衆を主体とした検討も、祝祭と社会との関係を考えていくうえで重要な研究視角となろう。つまり、祝祭は新たな都市文化の形成に大きく影響を与えただろうし、国家によって参加が求められた都市民たちは、もはや単なるファクターとしてではなく、自らが積極的に祝祭の場を楽しみ、都市文化の担い手へと成長していったと考えられるからである<sup>(37)</sup>。大正、昭和初期の東京で催された天皇家の祝祭が、もはや人々にとって「愛国的な心性ではなく」外出や消費を目的とした「都市的な心性を喚起するイベント」であったと指摘する右田の論稿は示唆的である（右田 2012）。実際に、近代イスタンブルにも消費文化は到来した。19世紀末にはガス灯の普及や市電の開通により、人々は夜遅くまで外に出て、

食事や談笑、演劇、音楽を楽しむことができるようになった (Wishnitzer 2014; 永田・江川 2015: 62-65, 261-335)。為政者が主催した祝祭もまた、そういった娯楽のひとつとして人々に不可欠なイベントになっていたことは、もはや想像に難くない。「非日常」を造り出す祝祭がもつ本来の機能に立ち返り、社会に生きる個々人が自ら主体となった余暇 (レジャー) や消費の場としての王権祝祭のあり方については、今後の課題として別稿に改めることとする。

## 註

- (1) 「王の祝祭」の語句は、オスマン朝の史料上で用いられる「Sûr-ı Hümâyûn」に対して筆者が独自にあてた訳語である。一般に「帝国の」、「帝室の」といった邦訳があてられる「Hümâyûn」に対しては他地域における王権儀礼研究との比較史的視座を示すため、あえて「王の」と訳出している。
- (2) 同様の形式を「年祭」と称する研究論文もある (渡辺 1998)。
- (3) オスマン近世史研究における論点や先行研究の動向については、佐々木 2014 を参照。
- (4) 筆者が以下の諸文献のデータを参照し、算出した数値 (奥 2010: 13)。Purgstall 1835-39; Uzunçarşılı 1947-1959; Danişmend 1971-1972; Nutku 1995; Arslan 1999; Arslan 2008-2011; And 2000.
- (5) カテゴリーの問題については、奥 2009 の稿末に今後の課題として挙げている。
- (6) 即位ならびに葬儀については、主に次の3つの研究を参照。Uzunçarşılı 1945: 182-188; Özcan 1993: 108-114; Ertuğ 1999.
- (7) 帯剣式については、主に次の3つの研究を参照。Pakalın 1946, II: 259-264; Günyol 1967: 678-679; Özcan 2002: 408-410.
- (8) 金曜礼拝に合わせて君主が宮廷外のモスクで合同礼拝をおこなう儀礼行事であり、行幸を伴うため姿見せの機会としても重要視される (İpşirli 1993; Karateke 2004: 102-122)。
- (9) スッレ Surre とは、巡礼月にあわせて両聖地 (メッカとメディナ) に送り届けられた奉納金や供物を指す。君主によるスッレ (Surre-i Hümâyûn) は、大規模な隊列を伴って運ばれた (Karateke 2004: 206-207; Buzpınar 2009)。
- (10) 新君主が確定した段階で、前君主の血を引くその他の王子は予防的措置として処刑された。
- (11) 帝都イスタンブールで開催された王子メフメト (後のメフメト3世: 在位 1595-1603年) の割礼を祝う祝祭 (Stout 1966; Terzioğlu 1995; Atasoy 1997; 奥 2013)。
- (12) 官僚であったセラーニキー (1600年歿) によって執筆された、1563年から1600年までを扱った歴史書。
- (13) ムラト3世の場合はこのエユブ参詣よりも前に金曜礼拝があったため、即位後初めて民衆の前に姿を表したのは後者の時となった。

- (14) たとえば、ヨーロッパの王権儀礼の分類を論じたものに、石井 2002、二宮 2007。
- (15) 16 世紀以降に君主が結婚の契りを交わした例外として名高いのは、16 世紀中期の繁栄を牽引したスレイマン 1 世から格別の寵愛を受けたヒュッレム妃であり、スレイマンとの間に 5 男 1 女をもうけた。なお、この事例に加えてアンドは、1622 年のオスマン 2 世とシェイフルイスラームの娘との結婚、1647 年の君主イブラヒムとテリリ・ハセキ・ヒュマーシャーフ妃との結婚を挙げる (And 2000: 33)。
- (16) たとえば、18 世紀中期にあたるマフムト 1 世とオスマン 3 世の治世下には、合計約 27 年の間に王族の子どもが一人も生まれなかった (Önal 2012: 43)。
- (17) 1759 年、ようやくムスタファ 3 世に第一子となる娘ヒベトゥッラーフ・スルタンが誕生した。君主自ら 7 日間の祝祭を要望し、一か月の準備を経て祝祭が催された。公的な記録となる『祝祭の書』も 30 年ぶりに作成された (And 2000: 37)。『祝祭の書』については、註(25)も合わせて参照されたい。
- (18) Sertoğlu 1986; And 2000; Alikılıç 2004 における各項目ならびに語句説明欄。
- (19) Uzunçarşılı 1945; Pakalın 1946; Karateke 2004; Sâmî 2004; Devellioğlu 2010; Yılmaz 2010 における各項目ならびに語句説明欄。
- (20) (旧) 首相府オスマン文書館 (大統領府オスマン文書館) の検索データベースの中には、18 世紀以前の「誕生」にかんする史料について、内容の検討なしに「君主の誕生日」として要約を提示するものも散見される。
- (21) 議論の動向をまとめたものに、秋葉 2005 がある。
- (22) たとえば、イギリス女王即位記念祝典 (キャナダイン 1992; 木畑 1996; 井野瀬 2002) やドイツ皇帝生誕祭 (小原 2014) の事例が挙げられる。日本もまた、この「儀礼競争」の時代に追随した国の一つである (フジタニ 1994; 原 2011)。
- (23) 典拠は註(4)に同じ。
- (24) この時に割礼を受けた王子は、後にそれぞれ君主として即位するアブデュルメジドとアブデュルアジズである。
- (25) 『祝祭の書』は、時の君主が催した祝祭を記録した散文もしくは韻文の公式記録である。『祝祭の書』はすべての祝祭に対して作成されたものではなく、最も古い 1582 年の祝祭のそれを含めて、13 回の祝祭にのみ存在が確認される。したがって、1834 年と 1836 年の両祝祭は、王権側によって重要とみなされた祝祭であったと判断することができる。特に後者の祝祭は、盛大に催された最後の「王の祝祭」ともいわれ、個別研究に Işık 2016 がある。
- (26) 史料上での明言はないが、在位に抛ればジョージ 3 世 (在位 1760-1820 年) となる。
- (27) マフムト 2 世の誕生日はヒジュラ暦のラマザン月 14 日であり、断食月の最中となる。

- (28) Velâdet-i bâ-sa'adet-i hümayûn-ı hazret-i şâhâne ve cülûs-ı meyâmin-i me'nûs-ı cenâb-ı pâdişâhâne
- (29) 1847年の祝祭では、第11代アメリカ大統領ジェームス・K・ポーク（在任1845-49年）による祝福を受けた（Günaydin 2014: 90）。
- (30) 春分の日 Nevruz を元旦とする3月を月初めとした太陽暦（ユリウス暦に依拠）。ルーミー暦とも呼ばれ、1790年より公的に運用された。太陰暦であるヒジュラ暦は季節を反映しないため、農事とかかわりが深い徴税に不向きであり、財務暦はそれを補完する役割を果たした（Pakalın 1946, II: 399-401; Wishnitzer 2015: 18-20）。
- (31) たとえば、君主の子どもが間もなく生まれるという時期に出された、祝砲のための火薬を確保、調達するよう求める嘆願書。C.AS 439/18259 (1775年); AE.SABH.I 135/9092 (1781年); C.SM 153/7665 (1789年)。
- (32) 1675年にイングランド海軍の長官ピーブスが、財政改善策として礼砲発射の際の火薬消費を削減するため、その上限を21発に抑えたことが由来とされている（小林 2007: 195-196）。
- (33) たとえば1582年祝祭では、大宰相を筆頭に各宰相やルメリ州軍政官などの名が挙げられる（And 1982: 102）。
- (34) 即位25周年の祝祭は同治世期で最も盛大に行われたといわれ、記録史料も多い。この時の祝賀に合わせて行われたヒジャーズ鉄道の区間開通式については、永島 2014がある。
- (35) 比較研究として、明治期の日本における祝祭日の新設・変更を論じた有泉 1968が有益。
- (36) 祝砲発射や燈明飾り、見世物などの興行が停止されるかわりに、祝賀の意の表明として記名するための記帳台が宮廷に用意された（Karateke 2004: 42-43）。
- (37) たとえば、帝国末期に祝祭の中止や見世物の縮小が公示された際に、祝賀の場を望む民衆の要望に配慮して祝砲のみが放たれたこともあったという（Batmaz 2007: 37）。

## 参考文献

### I. 史料

#### Başbakanlık Osmanlı Arşivi

AE.SABH.I (Ali Emiri Abdülhamid II), no. 135/9092.

A.MKT.UM (Bab-ı Asafi Mektubi Kalemî Umumî), no. 521/77.

C.AS (Cevdet Askeriye), no. 439/18259.

C.SM (Cevdet Saray), no. 153/7665.

HAT (Hatt-ı Hümayun), nos. 243/13694, 684/33242, 1187/46763N.

Cevdet, Ahmet 1891: *Târih-i Cevdet*, vol. 2, Matbaa-yı Osmaniye, İstanbul.

Cevdet, Ahmet 1980: *Ma'rûzât*, Y. Halaçoğlu (ed.), İstanbul.

- Lûtfî, Ahmed Efendi 1999: *Vak'anüvis Ahmed Lûtfî Efendi Tarihi*, vols. 8, A. Hezarfen (ed.), İstanbul.  
Selâniki, Mustafâ 1970: *Târih-i Selâniki: Die Chronik des Selâniki*, K. Schwarz (ed.), Freiburg.

## II. 研究

- Alikılıç, D. 2004 : *İmparatorluk Seremonisi: Osmanlı'da Devlet Protokolü ve Törenler*, İstanbul.  
And, M. 2000(1959) : *40 gün 40 gece*, İstanbul.  
And, M. 1982 : *Osmanlı Şenliklerinde Türk Sanatları*, Ankara.  
Arslan, M. 1999 : *Türk Edebiyatında Manzum Surnameler: Osmanlı Saray Düğünleri ve Şenlikleri*, Ankara.  
Arslan, M. 2008-2011 : *Osmanlı Saray Düğünleri ve Şenlikleri*, vols. 8, İstanbul.  
Atasoy, N. 1997 : *1582 Surname-i Hümayun: Düğün Kitabı*, İstanbul.  
Ayyıldız, N. 2008 : *II. Abdülhamid Dönemi Saray Merasimleri*, İstanbul.  
Batmaz, Ş. 2007a : “Osmanlı Devleti’nde bir Merasim Kaidesi olarak Topla Selâmlama (1800-1919),” in *Bilimname*, 12, 187-199.  
Batmaz, Ş. 2007b : “1297 (1879/1880) Tarihli Bahriye Kânûnnâmesi’ne göre Osmanlı Devleti’nde Velâdet-i Hümayun kutlamaları,” in *SDÜ Fen Edebiyat Fakültesi Sosyal Bilimler Dergisi*, Mayıs(15), 23-38.  
Baysun, M. C. 1941 : “Ahmed I,” in *İslam Ansiklopedisi*, vol. 1, İstanbul, 161-164.  
Bozkurt, N. 2003 : “Mahya,” in Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi Genel Müdürlüğü (ed.), *Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi (DİA)*, vol. 27, İstanbul, 396-398.  
Buzpınar, Ş. T. 2009 : “Surre,” in *DİA*, vol. 37, İstanbul, 567-569.  
Danışmend, I. H. 1971-1972 : *İzahlı Osmanlı Tarihi Kronolojisi*, vols. 6, İstanbul.  
Demirel, F. 2014 : “A Modern Performance in Late Ottoman Times: Birthday Celebrations as Imperial Image-Making,” in S. Faroqhi and A. Özdürkmen (eds.), *Celebration, Entertainment and Theatre in the Ottoman World*, Seagull Books, 261-272.  
Devellioğlu, F. 2010 : *Osmanlıca-Türkçe Ansiklopedik Lûgat*, Ankara, 26. Baskı.  
Durmuş, İ. 2004 : “Osmanlılar’da Mevlid Törenleri,” in *DİA*, vol. 29, İstanbul, 479-480.  
Ertuğ, Z. T. 1999 : *XVI. Yüzyıl Osmanlı Devleti’nde Cülûs ve Cenaze Törenleri*, Ankara.  
Günaydın, M. 2014 : “II. Abdülhamid ve Saltanatı Süresince Kutlanan Yaş Günleri (1876-1909),” in *Sultan II. Abdülhamid Sempozyumu: 20-21 Şubat 2014, Selanik, Sosyo-Kültürel Hayat-Sanat-Basın Birdiriler*, vol. 3, Ankara, 71-122.  
Günyol, V. 1967 : “Kılıç Alayı,” in *İslam Ansiklopedisi*, vol. 6, İstanbul, 678-679.

- Işık, M. 2016 : *Mihrimah Sultan: Osmanlı'da Siyaset ve Şenlik: 1836 Sûr-ı Hümayunu*, İstanbul.
- İpşirli, M. 1993 : "Cuma Selâmlığı," in *DİA*, vol. 8, İstanbul, 90-92.
- Karateke, H. 2004 : *Padişahım Çok Yaşa: Osmanlı Devletinin Son Yüz Yılında Merasimler*, İstanbul.
- Nutku, Ö. 1995 : *Tarihimizden Kültür Manzaraları*, İstanbul.
- Önal, A. 2012 : "Şenlik ve Siyaset: Şehzâdelerin Doğum ve Sünnet Şenlikleri," in Ş. Haşim and Ş. Nurdan (eds.), *Osmanlı Dünyasında Çocuk Olmak*, İstanbul, 21-52.
- Özcan, A. 1993 : "Cülûs," in *DİA*, vol. 8, İstanbul, 108-114.
- Özcan, A. 2002 : "Kılıç Alayı," in *DİA*, vol. 25, İstanbul, 408-410.
- Pakalın, M. Z. 1946 : *Osmanlı Tarih Deyimleri ve Terimleri Sözlüğü*, 3 vols., İstanbul.
- Purgstall, V. H. 1835-1839: *Histoire de L'Empire Ottoman depuis Son Origine jusqu'à Nos Jours*, I-XVI, Traduite de L'Allemand par J. Hellert, Paris. (2<sup>ème</sup> ed., ISIS, İstanbul, 1993-2000 を使用)
- Sâmî, Ş. 2004 : *Kâmûs-ı Türkî*, Ö. F. Akün (önsöz), İstanbul.
- Sertoğlu, M. 1986 : *Osmanlı Tarih Lûgati*, İstanbul.
- Stout, R. E. 1966 : *The Sur-i Hümayun of Murad III: A Study of Ottoman Pageantry and Entertainment*, Ph.D. Thesis, Ohio State University.
- Terzioğlu, D. 1995 : "The Imperial Circumcision Festival of 1582: An Interpretation," in G. Necipoğlu (ed.), *Muqarnas*, 12, Leiden, 84-100.
- Uzunçarşılı, İ. H. 1947-1959 : *Osmanlı Tarihi*, 9 vols., Ankara.
- Uzunçarşılı, İ. H. 1945 : *Osmanlı Devletinin Saray Teşkilatı*, Ankara.
- Yıldız, M. 2009: "Osmanlı Devleti'nde Topun Savaş Dışında Bazı Kullanım Alanları," in *Türk Dünyası Araştırmaları*, 180, 180-194.
- Yılmaz, F. 2010 : *Osmanlı Tarih Sözlüğü*, İstanbul.
- Wishnitzer, A. 2014 : "Shedding New Light: Outdoor Illumination in Late Ottoman Istanbul," in J. Meier et al. (eds.), *Urban Lighting, Light Pollution and Society*, New York and London.
- Wishnitzer, A. 2015 : *Reading Clocks, Alla Turca: Time and Society in the Late Ottoman Empire*, Chicago and London.
- 秋葉淳 2005 : 「近代帝国としてのオスマン帝国：近年の研究動向から」『歴史学研究』798、pp. 22-30.
- 有泉貞夫 1968 : 「明治国家と祝祭日」『歴史学研究』341、pp. 61-70、88.
- 石井三記 2002 : 「ヨーロッパの王権儀礼：フランス宮廷」『王権と儀礼』（岩波講座 天皇と王権を考える5）、岩波書店、pp. 121-151.
- 井上勝生 1989: 「一八六八年の天皇誕生日の祝祭：近代成立期の日本統合について」『史林』72-3、

pp. 47-89.

- 井野瀬久美恵 2002:「表象の女性君主: ヴィクトリア女王を中心に」網野善彦他(編)『ジェンダーと差別』(岩波講座 天皇と王権を考える 7)、岩波書店、pp. 255-282.
- 鶴沢由美 2008:「近世における誕生日: 将軍から庶民まで そのあり方と意識」『国立歴史民俗博物館研究報告』141、pp. 225-263.
- 江川ひかり 1998:「19世紀中葉バルケスシルの都市社会と商工業: アバ産業を中心に」『お茶の水史学』42、pp. 1-42.
- 奥美穂子 2006:「オスマン帝国における祝祭の社会史的考察: 王家主催の1582年祝祭を中心に」『駿台史学』129、pp. 83-104.
- 奥美穂子 2009:「オスマン帝国における「王の祝祭」像の再構築にむけて」『明大アジア史論集』13、pp. 111-125.
- 奥美穂子 2010:「オスマン帝国の「王の祝祭」にみる政治文化: 1530年と1582年の割礼祭の比較」『比較都市史研究』29-1、pp. 13-30.
- 奥美穂子 2013:「オスマン帝国における1582年祝祭のプログラム復元: 「王の祝祭」にみるイスタンブール都市社会の一断面」『比較都市史研究』32-1、pp. 33-57.
- 小原淳 2014:「皇帝生誕祭と国民統合」『世界史研究論叢』4、pp. 50-67.
- 木畑洋一 1996:「ジュビリー・イアーズ: 帝国の祭典」松村昌家他(編)『世界の中の英国』(英国文化の世紀5)、研究社出版、pp. 3-23.
- キャナダイン, D 1992:「コンテキスト、パフォーマンス、儀礼の意味: 英国君主制と「伝統の創出」1820-1922年」辻みどり、三宅良美(訳)、E. ホブズボウム他(編)、前川啓治他(訳)『創られた伝統』紀伊国屋書店、pp. 163-258.
- 小林幸雄 2007:『図説 イングランド海軍の歴史』原書房。
- 佐々木紳 2014:「オスマン憲政史の新しい射程: 近世史と近代史の接合にむけて」『新しい歴史学のために』285、pp. 37-51.
- 永島育 2014:「アブデュルハミト二世と世紀転換期のオスマン帝国: ヒジャーズ鉄道を中心に」『史観』171、pp. 44-65.
- 永田雄三、江川ひかり 2015:『世紀末イスタンブールの演劇空間: 都市社会史の視点から』白帝社。
- 二宮宏之 2007:「王の儀礼」『フランス アンシアン・レジーム論』岩波書店、pp. 277-305。(初出「王の儀礼: フランス絶対王政」『シリーズ世界史への問い』7、岩波書店、1990年)
- 原武史 2011:『可視化された帝国: 近代日本の行幸啓』増補版、みすず書房。
- フジタニ, T 1994:『天皇のページェント: 近代日本の歴史民俗誌から』NHKブックス。
- 右田裕規 2012:「祝祭と消費: 大正・昭和初期の<都市的>な祝祭体験」『社会学評論』63-2、

pp. 256-273.

宮武志郎 1991:「15・16世紀オスマン海軍による火器技術の受容:ユダヤ教徒の役割の一端」『オリエント』34-1、pp. 48-64.

宮武志郎 2004:「オスマン朝における火器技術と国家の変容」『歴史学研究』785、pp. 17-24.

渡辺節夫 1998:「ヨーロッパにおける国王祭祀と聖性」水林彪他(編)『王権のコスモロジー』弘文堂、pp. 259-281.

附記:本稿は、JSPS 科研費(課題番号 26370831)による成果の一部である。

(明治大学文学部兼任講師)